発議案、台南市議会との友好交流協定締結に反対の立場で討論を行います。

反対の最大の理由にまず市民不在で市議会間の協定を結ぶ事にあります。

両市の間に、一定の民間交流があったのは事実です。しかし、それは大半の市民にとって共通認識となっていません。

その状況で、藤枝市と台南市との自治体間の協定が未だ結ばれていないのに、なぜ議会同士で結ぶのか。少なくとも両市間の協定があり、それを発展した形での議員間交流はあり得る話です。しかし、発議案にある単なる側面からの支援、相手の好意に寄せる熱意にこたえるといった理由で、行政から独立した議会が協定を結ぶ理由にはなりません。それとも、政治的な政策的な意図でもあるのか、質疑では何ら明らかにされませんでした。

次に協定が議員の海外視察の口実にされることが明白だからです。

議員の海外視察に、市民の厳しい目線がある事はご承知だと思います。

私は海外視察そのものに反対はしません。本当に必要なもの、例えば、市が直面している課題、市民が広く認識している課題があり、その解決が視察で得られるのであれば、大手を振ってでも出かけるべきです。

ところが、今回の協定締結は、視察ありきの協定であり、真の友好につながるものではありません。

民間は別として、本市議会と台南市議会との交流はどうだったか。

　視察団としては、藤枝市から台南市へ3回出かけています。一方的にです。協定を結ぶなら、お互いに行き来し合う関係を築き上げてからが自然です。

会派代表者会議で私はまずこうした一方的な関係を改善する事、それが第一歩だと。常々言ってきました。

特に2回目の視察の理由は、京都を訪問している台南市議会のメンバーに当時の藤枝市議会正副議長がわざわざ出向いて行って、現場で今度台南市へ来てくださいと言う招待状をもらったからという理由です。台南市議会は一度たりとも藤枝には来ていない。朝貢外交と言われても仕方ないのが現状です。

そして今年10月26日から28日の3度目の視察です。この時は、議長と大石やすゆき議員、多田晃議員の3名ですが、当初は台南市議会が藤枝に来るとの連絡があった。ところが本市での受け入れが通訳や予算の関係で難しいという事で、わざわざこちらから出かけて行った。受け入れるお金はないのに出かけるお金はあるという説明のつかない訪問です。なお、この時、2月28日の協定の期日を決めてしまったことで混乱したのは、後で述べます。

　行政サイドでは、台南の貿易企業であるエンタツと友好協定を結び、産業面での交流があり、高校生たちの相互訪問などが行われてきました。

　しかし、これは、行政がやるべき事であって、議会とは別次元の問題です。そもそも、協定をもってわざわざ議会がでしゃばる話ではない。行政レベルの取組を側面から支援するのであれば、議員本来の仕事である質問の場で市の取組を促していけばいい。

第3回目の視察報告書には「相手の議長から来年7月に台南市で開催される全国日台友好議員協議会主催の、第10回日台交流サミット開催に併せ、訪問を要請された」との内容があります。正式に訪問する事を決定したのではないとの説明がありましたが、結局、こういうノリになってしまい、市民不在の元で、協定がある事が議員の海外視察の大義名分となります。慎重に検討することなく、視察が許されてしまう。この意味からも議会間の協定は、それを結ぶ規定事実を積み重ねてから行うべきであります。

次に、この問題を巡って起こった議会内の混乱についてです。

まず、3回目の10月の3名の派遣について、代表者会議、その後の議員派遣の議決に私と佐藤議員は反対しました。この理由については、先ほど述べた通りです。

11月10日の全員協議会で、この３名の訪問（１０月２６日～２８日）の報告が行われました。そこには、来年2月28日に友好協定を結ぶことで合意したとの報告がありました。

これに対し、代表者会議において賛成しながら、会議に参加していない会派の議員から、どこでこうした決定がなされたのかと疑義が出されました。実際、代表者会議では、具体的な日程を決める話はなく、今後の協定締結へ向け手続きの打ち合わせを行うものだという事だったはずです。

全議員の同意を得られていないまま、日程まで決めてきてしまった。混乱はここから発生しました。

仕方なく、議長が仙台に訪問中の台南市議会のメンバーの元を訪れて、協定の一旦延期の申し入れを行うという事態に陥った。相手の台南市議会からは、１０月の訪問時、台南市議会開会中にも拘わらず本市に併せて日程を調整、かつ、協定締結に慎重な議員もいたが、事前に全議員の合意をとっていた。ところが一方的に覆されたこと、国際間の信頼を損ねない事態として受け入れられてしまったと聞きます。

既に調印式当日の２月２８日宿泊の市内ホテル３４名分や飛行機の手配も済んでいるのに、調印式がないのは格好がつかないので、本来の友好協定ではなく、市議会が日台議員連盟加入を表明する場にできないかと、筋違いの提案も行われた。

議会が勝手に決めてきてしまったことから、一旦、この状況で延期になったのですが、民間レベルで数々の交流事業を行っている市民の方から、１０年来築き上げた交流事業が議会の都合で振り出しになってしまう事、我々の知らないところで議会が物事を進めたこと、などの声があり、その過程で、急遽、議案となっているのがこの発議案です。この間、わずか一か月、碌な議論がないまま二転三転した始末です。

しかし、だからといって賛成する事は残念ながらできない。これまで述べた理由と、この混乱を招いた議会の責任が反故にされるからです。

賛成会派内で、意思の疎通が充分でなかったと、代表者会議で賛成会派から謝罪もありましたが、問題の根はもっと深いところにある。

まず、会派間の調整の場でしか過ぎない代表者会議でほとんど全ての事を決めてしまった。10年前流行った言葉に「開かれた議会を求めて」というのがありますが、本市議会では当の議員の間ですら開かれた議会になっていないというのが鮮明になってしまった。

様々な要因があるなかで、わけても深刻なのは、議会運営すべてについて設置された公的な議決機関である議会運営正副委員長が、代表者会議に参加していない事です。ここに、最大の問題があると感じていますが、この問題を契機に、こうした非民主的な市議会の実態を徹底的に検証する必要があり、ただ賛成すれば、議会自身考える事をしなくなってしまいます。

こうした経緯がありますから、今協定は、その中身のほとんどが和歌山市議会と台南市議会との協定書をほぼ丸写ししたものであったり、議長名で台南市議会議長あての、これまでの経緯を記した謝罪文があったり、出だしの段階から、まず発展は望めない状況に陥っています。

最後に本日の質疑において、壇上での提案者と質疑に対する答弁者が異なるという前代未聞の事態を引き起こした、最後の最後まで市議会に汚点を残す残念な結果を迎えようとしています。

更に、発議案には18名の賛成議員が記載されておきながら、明確に反対討論者が2名いる事が明名でありながら、今に至るまで、誰一人賛成討論をする人がないというのは、敗北そのものではないのですか。

このような協定が、両市議会のために何ら寄与する事はあり得ません。

以上、反対討論とします。